

# ダニエル書 - 第百八十八番

ラフィアからパニウムまで：古代の戦いの預言的意義を明らかにする

Jeff Pippenger

2024-04-18

ラフィアの戦いとパニオンの戦いは、時期も背景も異なる別個の歴史的出来事だが、古代ユダヤおよびその周辺地域の歴史においていずれも重要な意義を持つ。ラフィアの戦いは紀元前217年に起こった。パニオンの戦いは、紀元前200年に、セレウコス朝（北の王）とプトレマイオス朝（南の王）のあいだで起こった。これら二つの戦いは、ダニエル書第11章11節から15節に比定されている。これら二つの戦いは、紀元前167年のマカバイの反乱に先行した。

パニウムの戦いは、その戦闘が起きた近隣の地形であるパニウム山にちなんで名づけられた。パニウムという名称はギリシアの神パンに由来し、そこには彼に捧げられた神殿があった。その地はパン崇拝と結びついていたので、パニウムとして知られていた。その神殿複合体はしばしば「パンの聖域」と呼ばれ、神パンに捧げられた宗教的な献身と礼拝の場としての役割が強調された。「ニンファエウム」という語は、古代ギリシアおよびローマの宗教において水のニンフに捧げられた記念建造物または聖所を指す。パニウムの神殿複合体には洞窟と自然の泉が含まれ、そこにはニンフが住むと信じられていたため、パニウムのニンファエウムとも呼ばれることがあった。

ヘロデ大王の子ヘロデ・ピリポによってこの都市が再建・拡張された後、ローマ皇帝カエサル・アウグストゥスとヘロデ・ピリポ自身を讃えて、カイサリア・フィリピと呼ばれるようになった。神殿群はこの都市における重要な宗教中心地であった。

アウグストゥス帝の治世に、その神殿はアウグストゥスを讃えて再奉献または改称され、皇帝崇拝やローマの宗教的慣行が地域の宗教的景観に統合されていったことを反映していた。パンの神殿があった古代都市カイサリア・フィリピの近くの地域は、時に「地獄の門」または「ハデスの門」と呼ばれた。

ダニエル書11章16節から19節には、異教ローマが聖書の預言における第四の王国、そして同章における「北の王」として確立されるために打ち破るべき三つの地理的征服領域が示されている。16節では、ローマの将軍ポンペイウスが紀元前65年にシリアを、続いて紀元前63年にエルサレムを征服したことが示される。17節から19節では、三つの障害の第三として、ユリウス・カエサルによるエジプトの征服が示されている。紀元前31年のアクティウムの海戦は、ダニエル書11章24節の成就として、異教ローマが至高の支配を行う360年間の始まりを画する。

第20節ではアウグストゥス帝の治世が示され、その治世のもとでイエスが生まれた。続く第21節と第22節では、邪悪なティベリウス帝の治世が特定され、それによってキリストの十字架刑の時期が示される。第23節では、マカバイ派のユダヤ人が異教のローマと結んだ同盟が示され、こうして第11節に始まった歴史の流れはいったん中断され、叙述は紀元前161年から紀元前158年の時代へとさかのぼる。

第23節はマカバイ家の系譜を示しているが、彼らに関する預言的な筋道の細部すべてを示しているわけではない。だが歴史の記録がそれを明らかにしている。紀元前217年、ラフィアの戦いが起こり、その余波で幼い王のもとエジプトは脆弱な状態に置かれた。紀元前200年、セレウコス朝や他のギリシアの諸王がその幼王への対処を図る中で、ローマが歴史に介入し、エジプトの幼王の擁護者となった。同年、パニウムの戦いが起こった。やがて紀元前167年には、マカバイ家のゲリラ戦が始まった。

マカバイの反乱は紀元前167年、モディインで始まり、マカバイ人はセレウコス朝と戦っただけでなく、セレウコス朝と同盟していると彼らが判断したユダヤ人とも交戦した。反乱は宗教的動機に基づくもので、内外の敵を相手に遂行された。紀元前164年にマカバイ人は神殿を再奉獻し、この出来事はユダヤ教の祭りハヌカーで記念されている。その年、悪名高いアンティオコス・エピファネスが死去した。その後、紀元前161年から紀元前158年にかけて、23節の「同盟」がローマと結ばれた。

マカバイとその反乱、そしてローマとの同盟への直接の言及は二十三節にしか見られないが、ハスモン朝と呼ばれるその王朝の歴史は紀元前167年にモディインで始まり、十字架の時まで続いた。ハスモン朝の最後の代表者は、キリストの時代のパリサイ人であった。ゆえに、マカバイに代表される背教的ユダヤ教の歴史には、紀元前167年のモディインでの反乱に始まり、イエスが十字架にかけられたことを述べる二十一節と二十二節で終わる、預言的な系譜がある。

彼らの歴史は16節で転換点を迎えた。そのとき、ローマは初めてポンペイウスによってエルサレムを征服した。当時、彼がエルサレムにもたらした破壊の主な動機は、ハスモン朝の二派の間の争いであった。その時点（紀元前63年）から、ユダヤはローマの支配下に置かれた。マカベアのハスモン朝は、預言的には紀元前167年のモディインの戦いに始まり、紀元前63年にローマの隷属下に置かれた。その歴史の始まりのすぐ後、マカベアは紀元前161年から紀元前158年にかけてローマとの同盟を提案し、締結した。彼らは紀元前63年から、十字架と西暦70年のエルサレムの最終的な破壊に至るまで、ローマの支配下にあった。

マカバイの預言的な系統は背教的ユダヤ教の系統であり、それゆえ背教的プロテスタントイズムの系統の型を示している。パニウムの戦いから16節の日曜法に至るまで、紀元前200年、紀元前167年、紀元前164年、そして紀元前161年から紀元前158年までの同盟に関する預言的出来事が、背教的プロテスタントイズムの歴史において繰り返される。これらの道標は、日曜法に先立って、七人に属する第八の大統領の歴史の中で起こる。紀元前200年は、背教的プロテスタントイズムの角の内的な系統を表す紀元前167年に対して、共和党の角の外的な系統を表している。

これらの道しるべは、事実上、ハスモン朝の歴史の系譜の中に隠されているが、それにもかかわらず、ダニエル書11章40節の隠された歴史の一部をなしている。それは、「終わりの日々に関するダニエルの預言のその部分」に属する系譜である。

ユダヤ教がマカバイの反乱を記念してハヌカーを祝うという事実は、マカバイを義人と規定するものではない。反逆のゆえに、七十年の捕囚の後に再建された神殿にシェキナは決して戻ることはなかった。最後の預言的メッセージは、マカバイのおよそ二世紀前にマ

ラキを通してもたらされた。マカバイの歴史は、彼らが政治的指導者に大祭司も兼務させたことを示しており、これはエジプトのプトレマイオスが試み、またウジヤ王も試みた、まさにその罪である。伝承では、神はプトレマイオスはその冒瀆的行為に及ぶのを阻むために介入したとされ、また神の言葉は、ウジヤ王が祭司と王の務めを行おうとしたときに神が実際に介入したことを直接示している。彼らの王朝が最終的に生み出したものはパリサイ派だった。現代ユダヤ教のユダヤ人が歴史的に敬意を払っているとしても、マカバイが義の象徴であったと結論づける理由はない。

宗教改革はルターの時代に始まり、漸進的に展開した。それは新しい伝統ではなかった。イエスとその弟子たちこそがプロテスタントであり、宗教改革とは、ルターや他の改革者たちが目覚めさせられた歴史の暗闇への覚醒であった。その漸進的な宗教改革の頂点はミラー派運動であった。神は、初期の改革者たちをバビロンの罪に目覚めさせるだけでなく、彼らを御自分の律法と天の聖所における働きについての完全な理解へと導こうと意図しておられた。1844年4月19日、プロテスタントは改革の増し加わる光を拒み、背教的プロテスタンティズムへと墮した。

そのとき、忠実なミラー派の人々は「外套を与えられ」、成熟したプロテスタントのキリスト者となるための働きを完成するべく、至聖所へと導かれた。1863年、不従順によって、その外套を与えられていた者たちはプロテスタントの外套を脇に置き、ラオデキアの外套を身にまとった。十四万四千人の封印の最終期は、2001年9月11日から22年後、すなわち2023年に始まり、その時代にユダの部族の獅子は、ダニエル書11章40節の隠された歴史、すなわち1989年のソ連崩壊から間もなく来る日曜法に至るまでの歴史を補完する真理の封印を解いている。この過程で、ユダの部族の獅子は、背教したプロテスタントの象徴として、背教したユダヤ教の歴史の封印も解いている。

神の背教した民の二つの系譜は、文字通りのユダであれ霊的なユダであれ（いずれも栄光の地）、いずれもエルサレムの征服で終わる。前者は紀元前63年、後者は間もなく到来する日曜法においてである。両方の系譜は、誤った宗教的確信に動機づけられた戦いを表している。いずれもギリシャの宗教哲学に対する戦いを表し、最終的には背教者がローマの支配下に置かれることで終わる。私は、40節の三つの戦いを、1989年のソ連崩壊、ウクライナ戦争、そして日曜法の時のパニウムを表すものとして特定している。これは、その三つの戦いと三つの世界大戦との違いを明らかにするためである。

神の言葉は差し迫った危険を警告してきた。この警告を顧みなければ、プロテスタント世界は、罠から逃れるには遅すぎる時になってはじめて、ローマの真の目的が何であるかを知ることになるだろう。ローマは静かに権勢を拡大している。ローマの教義は、立法の場においても、諸教会においても、そして人々の心の中においても、その影響力を及ぼしている。ローマは、秘かな奥まった場所に、かつての迫害が繰り返されることになる、その高く巨大な建造物を築き上げている。ローマは、人に悟られぬようひそかに、時が来て打って出るために自らの目的を進められるよう、その勢力を強化している。ローマが求めるのは有利な地歩だけであり、それはすでにローマに与えられつつある。私たちは間もなく、ローマ的要素の目的が何であるかを目にし、そして身をもって感じることになる。神の言葉を信じ、これに従う者はだれであれ、そのために非難と迫害を被ることになる。『大いなる争い』581ページ。

1989年のソ連崩壊を指し示す第10節から、第15節のパニウムの戦いに至るまで、教皇権は「打撃を与える時が来たときに自らの目的を推し進めるため、その勢力を強化してきた」。これらの節は、教皇権が用意した「罫」となる預言的状况を示しており、そこから「逃れる」ことは不可能である。最終局面、すなわちパニウムの戦いによって表されるときに、獣の像がアメリカ合衆国で形成される。その像の形成は、終わりの時の神の民にとっての最後の試練である。

主は私に、猶予期間が終わる前に獣の像が形成されることを、はっきりと示してくださった。それは神の民に対する大いなる試練となり、そのことによって彼らの永遠の運命が決定されるからである。…

この主題は黙示録13章に明白に示されている。[黙示録13章11-17節、引用]

これは、神の民が印を受ける前に必ず通らなければならない試練である。神の律法を守り、偽りの安息日を受け入れることを拒むことによって神への忠誠を証明したすべての者は、主なる神エホバの旗印のもとに列し、生ける神の印を受けるであろう。天来の真理を放棄して日曜日の安息日を受け入れる者は、獣の刻印を受けるであろう。Manuscript Releases 第15巻、15。

獣の像の形成は、ローマとの同盟が締結された時期によって表される。アメリカ合衆国のプロテスタントの角は1844年にローマの娘たちとなり、彼らが再び母に倣うことを決意するとき、その歴史の初めが終わりにおいて繰り返される。

私は、二本の角を持つ獣が竜の口を持ち、その力はその頭にあり、その口から布告が発せられるのを見た。次いで私は淫婦たちの母を見た。母は娘たちではなく、彼女たちとは別個で、明確に区別されていた。彼女の時はすでに過ぎ去り、その娘たち、すなわちプロテスタントの諸宗派が次に舞台上に上がり、母が聖徒たちを迫害したときと同じ精神を行動に移した。私は、母の権勢が衰えるにつれて娘たちが成長してきており、やがて彼女らはかつて母が振るった力を行使するようになるのを見た。

私は、名ばかりの教会と名ばかりのアドベンチストが、ユダのように、真理に敵対するためにカトリックの影響力を取りつけようとして、私たちをカトリック側に売り渡すのを見た。そのとき聖徒たちは目立たない民となり、カトリックにはほとんど知られていない。しかし、私たちの信仰と慣習を知っている教会や名ばかりのアドベンチスト（彼らは安息日のゆえに私たちを憎み、それを反駁できなかったからである）が、聖徒たちを裏切り、彼らは人々の制度をないがしろにする者だ、すなわち安息日を守り、日曜日を無視している者だとカトリックに密告するだろう。

それからカトリックはプロテスタントに、事を進めて、週の第七日の代わりに週の第一日を守らない者は皆殺されるべきだという布告を出すよう促す。多数を占めるカトリックはプロテスタントの側に立つ。カトリックは自分たちの力を獣の像に与える。そしてプロテスタントは、かつて彼らの母がそうしたように、聖徒たちを滅ぼすために行動する。だが、その布告が実を結ぶ前に、聖徒たちは神の御声によって救い出される。Spalding and Magan, 1, 2.

この一節には、神に忠実な者たちをカトリックに引き渡す「nominal」、すなわち「名ばかりの」二つのグループがいる。エレン・ホワイトが理解していた「名ばかりの教会」と

「名ばかりのアドベンチスト」の意味は、終わりの時代においてそれらが実際に表すものとは異なる。というのも、彼女のいう「名ばかりのアドベンチスト」とは、キリストの再臨を信じると公言するキリスト者を指していたからである。しかし、預言者たちは自分たちの生きていた時代よりも終わりの時代のために多く語っており、終わりの時代における「名ばかりのアドベンチスト」はラオデキアのセブンスデー・アドベンチスト教会を表し、「名ばかりの教会」は1844年にローマの娘たちとなった者たちの子孫である。

セブンスデー・アドベンチストは、「無名の人々」を憎むようになる。彼らは神の真の代表者であり、土地の安息を表す「安息日の真理」をアドベンチストが反駁できないからである。セブンスデー・アドベンチスト教会は、第七日を礼拝の日として堅持していると公言するが、終末の時代に彼らが反駁できない安息日はレビ記26章の「七倍」であり、それは彼らが1863年に退けた最初の基礎的真理である。

私たちが今取り上げている箇所は、間もなく到来する日曜法から始まる歴史に伴う預言的な動向を明らかにしていますが、日曜法に続く最後の試練の歴史は、まずアメリカ合衆国内で展開されます。日曜法の時にアメリカ合衆国は全世界に獣の像を立てることを強いるでしょうが、その働きを成し遂げる前に、すでにアメリカ合衆国内で獣の像が立てられていることとなります。

「宗教の自由の地であるアメリカが、良心に強制を加え、偽りの安息日を尊ぶことを人々に強いる点で教皇制と手を結ぶようになると、地球上のあらゆる国の民はその手本に倣うよう導かれるであろう。」 Testimonies, 第6巻、18.

「諸外国はアメリカ合衆国の手本に倣うだろう。たとえ米国が先頭に立つとしても、同じ危機が世界の至る所で私たちの民に及ぶであろう。」 『証言』第6巻、395頁。

神の民にとっての大いなる試練は、日曜法の前起こる。というのも、日曜法においてセブンスデー・アドベンチストに対する猶予期間が閉じるからである。試練は獣の像の形成として表されており、獣の像とは、教会がその関係を主導するかたちでの教会と国家の結合である。1844年にプロテスタントがローマの娘となったように、そして娘が母の像であるように、背教したプロテスタントは終わりの日に同様の働きを行う。イエスはいつも、物事の終わりをその始まりでもって示すからである。

ダニエル書十一章二十三節の「盟約」によって示されている歴史は、栄光の地にいる背教を標榜する民がローマと連合を結ぼうと手を伸ばしたことを表していた。紀元前161年から紀元前158年は、日曜法で頂点に達する獣の像の形成を表している。

次回の記事でこの研究を続けます。

しかし、「獣への像」とは何か。それはどのように形づくられるのか。像は二本の角を持つ獣によって作られ、獣への像である。また「獣の像」とも呼ばれる。したがって、その像がどのようなものか、またそれがどのように形づくられるのかを知るためには、獣そのもの—すなわち教皇制—の特性を研究しなければならない。

初代教会が福音の単純さから離れ、異教の儀式や慣習を受け入れて墮落したとき、教会は神の霊と力を失った。そして人々の良心を支配するために、世俗の権力の支持を求めた。その結果として現れたのが教皇制であり、教会は国家の権力を支配し、それ

を自らの目的、特に「異端」を処罰するために用いた。合衆国が獣の像を形成するためには、宗教勢力が世俗政府を支配し、国家の権威が教会によっても自らの目的を達成するために用いられるようにしなければならない。The Great Controversy, 443.